

プライマリケアNP活動の成果 2023年度版



大分県立看護科学大学大学院
実践者養成NPコース



(入試情報など、問い合わせ先)
大分県立看護科学大学 教務学生グループ 大学院担当
【住所】
〒870-1201 大分県大分市大字廻栖野2944-9
【TEL】 097-586-4300
【メール】
info@iota-nhs.ac.jp
<https://www.iota-nhs.ac.jp/site/examination/366.html>

ご挨拶

「患者さんにタイムリーに医療を提供したい。」
「受診する苦勞を訪問看護で減らしたい。」このように願い、本学では、2008年から大学院修士課程で、診療看護師（NP）を養成しています。慢性疾患の症状マネジメントに重点を置き、プライマリ領域のNPを育てています。

既に、76名が修了しました。本学のNPは、大分県の方々にお世話になって育ち、県内各地で活躍しています。NPがいることで看護の質が向上し、チーム医療が進むという効果も出ています。

本学のNPコースは、「特定行為研修機関」に指定されています。いくつかの特定行為には、診療報酬も認められており、NPの採用は経営的にも良いことがわかってきています。

本冊子は、診療看護師（NP）の活動を紹介しています。

本学のNPコースには、地域枠5名があります。看護師として5年間働いた方で、本学を修了後、大分県の地域医療に従事する意志を持つ方が対象です。自律性と協調性があり、チーム医療を進めたいと希望する看護師に入学していただきたいと願っています。

NPコースの講義はオンラインでも受講できます。また、厚生労働省の職業実践力育成プログラム（BP）に認定されていますので、受講料の補助も出ます。NPの活躍によって、大分県民が、地域で安心して暮らせるようになることを願っています。

大分県立看護科学大学

理事長・学長 村嶋 幸代

診療看護師(NP)とは(日本NP教育大学院協議会)

NP教育課程を修了し、NP資格認定試験に合格した者で、患者のQOL向上のために医師や多職種と連携・協働し、倫理的かつ科学的根拠に基づき一定レベルの診療を行うことができる看護師

診療看護師(NP) 7つのコンピテンシー

1. 包括的な健康アセスメントの実践能力 (検査を含む)
2. 医療的処置マネジメントの実践能力 (処方等を含む)
3. 熟練した看護実践の能力
4. 看護管理の能力
5. チームワーク・共同協働能力
6. 医療・保健・福祉システムの活用・開発能力
7. 倫理的意思決定能力

修士課程NP教育(55単位以上)

医学教育を強化

- ・基礎となる理論 5単位
- ・基礎となる医学知識 14単位
- ・特定行為技術(学内演習) 12単位
- ・統合力 2単位
- ・臨床実習 15単位

在宅・慢性期領域パッケージ
救急領域パッケージ
+その他19行為

入学要件:看護基礎教育+臨地経験5年以上

地域枠

- ア. 大分県内の保健医療福祉機関の看護部門の責任者から推薦状を得られる者
 - イ. 本学の卒業生及び修了生である者
 - ウ. 大分県内の小学校又は中学校または高等学校を卒業した者
- 上記 ア、イ、ウのいずれかに該当し、修了後県内で働く者

NPの質の担保・向上の取り組み

1. 大学院在籍中の試験

実習(15単位以上)に先立ち、OSCE(Objective Structured Clinical Examination:客観的臨床能力試験)を含む実習前試験を行い、合格した場合でないと実習を受けることができない。

2. NP資格試験と資格の更新

NPのコンピテンシーに関連した知識・技術などを習得し、NP資格授与に値することを確認するため資格試験で合格し、「診療看護師(NP)」の認証が受けられる。

3. NP資格の更新

NPの資格更新制度(5年ごと)に実施され、5年間の活動実績に関して書面審査を行い、NPに必要とされる能力を満たしていることの確認を行っている。

4. 各施設での研修

2年間の大学院修士課程において習得できる知識・技術には限りがあるため、就職先の医療機関に1～2年の研修をお願いしている。多くの病院では、指導医のもとで、総合診療部、救急部、外科、内科、手術室などの診療科を3～4か月でローテーションする研修を取り入れている。(P4 3名の例)

在学中の働き方のご紹介

学生	年次	M1		M2		
		前期	後期	前期	後期	
	履修スケジュール	科目履修 課題研究	科目履修 課題研究 試験	科目履修 特定行為関連実習	実習 課題研究発表 試験(学内) NP資格認定試験	
入学時の勤務状況	A学生 大分県内で常勤	講義に合わせてシフト調整 (深夜勤務明け・早出・年休など)		8月の実習までは 講義に合わせてシフト調整 (深夜勤務明け・早出・年休など)	9月実習開始時から休職 NP資格認定試験終了後から復職	
	B学生 大分県内で常勤	講義に合わせてシフト調整 早出・年休		6月まで講義に合わせてシフト調整 以降休職		
	C学生 大分県内で常勤	講義に合わせてシフト調整 (深夜勤務明け・早出・年休など)		M2から休職 実習終了後(12月下旬)から復職		
	C学生 大分県内で常勤 入学時に非常勤に切り替え	講義に合わせてシフト調整 (深夜勤務明け・早出・年休など)		休職 NP資格認定試験終了後から復職		
	D学生 大分県内で常勤	休職にて学業専念				
	E学生 退職してから進学	M2の9月実習開始までは3時間パートや短期のアルバイト			実習開始後から学業専念	

修了生の研修について（修了生3名の例）

研修目標	病態生理を理解したうえで、 判断力、実践力、特定行為のスキルを身につける。他職種の特徴を理解し、看護師としての経験、コミュニケーション能力を生かして、 医療チームとしての連携を図る能力と人間性を身につける	
	1)指導医の指導下で初期診察及び継続診察において生活状態や病状について医療面接、視診、打診、触診、聴診を実施し、必要な検査を行う 2)指導医の指導下で病状に応じた治療計画を立案できる。 3)指導医の指導下で病状に応じた治療計画を立案できる。 4)他職種との連携や調整ができる。 5)倫理観を持って実践を行うことができる。	
	研修スケジュール	研修内容
Aさん	指導医の担当患者と外来(救急)対応および特定行為研修等 ・月曜日 午後～内科カンファレンス2病棟 (医師-病棟スタッフ-セラピスト-薬剤師合同) ・木曜日 午後～糖尿病カンファレンス1病棟 午後から検査課で腹部エコー研修 ・金曜日 午後～内科カンファレンス (医師-病棟スタッフ-セラピスト-薬剤師合同) 1病棟・内科医合同カンファレンス	①各カンファレンスの中で、医療課題がありかつ在宅で継続介入が必要な患者を抽出し、病棟や外来、訪問看護、ケアマネージャーと連携し継続介入を行う ②療養支援室所属の診療看護師として、随時、院内や地域の多職種からのコンサルテーションを受ける ＊顔の見える関係づくりが必要 ＊多くの業務を抱えていたので、エコーの研修などは延長を申し出て、今でもいつでも行けるときに行って教えてもらうようにお願いしています。
Bさん	研修期間:(1 診療科 3 カ月ごとにローテーション) ・詳細な期間やローテーション計画は、各指導医の承諾が得られ次第立案 診療科の選定: 複数名の医師が在籍する診療科に関しては、統括指導医らと共に検討して決定	① 指導医に同行し、行われる診療を指導医と共に検討・実施する。 ② 電子カルテへの記載は「看護師」として行う。NP が入力した薬剤、検査オーダーなどは指導医に「承認」を頂く。 ③ 判断できないことに関して指導医へ相談する。 ④担当症例は後日、指導医へプレゼンテーションする。 医療安全に関して:院内医療安全フローシートを作成して実施する。
Cさん	初年度 総合診療科 6か月、救命救急センター6か月 2年目 総合診療科 3か月 救命救急センター2か月 小児科6か月(NICUと半々),形成外科1か月	①総合診療科 受け持ち患者回診、総合診療科カンファレンス 担当医とともに入院患者、新患・急患患者対応 主治医とのディスカッション 各種オーダー(検査、他科コンサルト、栄養等)の学習 動脈血採血、血液培養採取、超音波検査など 栄養管理 転院調整、転院搬送付き添い、診療録記録、サマリー記載など カンファレンス、回診、記録 ②救命救急センター 新患カンファレンス(プレゼン7分) 病歴、フィジカルアセスメント、検査結果、 プロブレムリスト、アセスメント、診療計画

医療ニーズの高い患者の在宅療養移行支援

～劇症型溶血性レンサ球菌感染症後の後遺症（四肢および呼吸筋麻痺） による気管切開および人工呼吸器装着状態患者との関わり～

臼杵市医師会コスモス病院 上野聖子(NP)

【入院中】

もともと元気で自宅で妻と暮らしていたが、感染症に罹患し、その後遺症で四肢麻痺や呼吸筋麻痺が残った。気管切開および人工呼吸器を装着し、寝たきりの状態であった。状態が不安定のため、症状固定や機能の維持向上を目標に多職種と共有しながら、状態に応じた症状マネジメントや救急初期対応を継続した。患者の身体的な苦痛だけでなく、家族も含めた精神的ストレスに対し、倫理的にも配慮しながら、ケア介入を行った。医療課題も多く、本人や家族の想いに寄り添いながら退院支援や退院調整を行った。

1. 入院中の関わり

- ・症状マネジメント
- ・主治医の包括的指示のもと救急対応および医療処置の実施
- ・栄養投与経路としてPICC留置し、その後もPICC管理を行っていた。
- ・本人の意思決定支援と家族の受容支援や代理意思決定支援と家族ケア
- ・多職種協働（病棟看護師やセラピストやCEや歯科衛生士など）
- ・退院支援および退院調整（在宅療養継続困難時の受け入れ方法の検討含む）

2. 患者の反応

ストレスを歯ぎしりや体動で表現し常にイライラした表情

3. 家族の反応

急性期に救命を選択したことに迷いがある。介護経験はあるが、人工呼吸器など医療的な経験はないため不安はある。しかし、一度は自宅に連れて帰ってあげたい気持ちがある。

【退院後】

気管切開及び人工呼吸器装着しており、特定行為『気管カニューレ交換』を実施し、退院後も気管カニューレ交換やPICC管理といった医療処置に加え、緊急時には医師の包括的指示のもとタイムリーに『直接動脈穿刺法による採血』の実施や『持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整』『脱水症状に対する輸液による補正』『感染徴候がある者に対する薬剤の臨時的投与』に関わった。容易に患者の全身状態は変動するため、できるだけ医療的処置やケアの方法は、患者さん自身の身体の状態を考えたものを在宅仕様で継続できるよう訪問看護師と一緒に考えた。

1. 退院後の関わり

- ・訪問診療や往診に同行・あるいはNPのみ訪問
- ・症状マネジメント
- ・主治医の包括的指示のもと救急対応および医療処置の実施
- ・訪問看護や在宅療養支援者へ継続ケアの移行
- ・家族ケア
- ・訪問看護との協働

2. 患者の反応

自宅では歯ぎしりがなくなり、穏やかな笑顔がみられる

3. 家族の反応

『連れて帰ってあげてよかった。とても穏やか。
何かあっても、病院ではなく、家で傍にいて見ていきたい。』

【まとめ】

タイムリーな症状マネジメントと多職種連携で、意思決定を支援しながら在宅移行できた。

患者・家族に寄り添い支える上野NP



病院から在宅へのシームレスな連携と強化

～地域医療の推進に向けたオンライン診療導入の取り組み～

杵築市立山香病院 竹尾千恵(NP)

【当院の役割と活動の背景】

切れ目のない質の高い医療サービスを目指し、保健・医療・介護が一体化した地域包括ケアシステムの構築のもと、診療看護師は連携の窓口として病院、介護老人保健施設、在宅を横断的に活動している。

新型コロナウイルスによる医療機関のひっ迫を契機に、デジタル化推進委員会を立ち上げ、「AIロボットチーム、オンラインカンファレンスチーム、オンライン診療チーム、デジタル環境管理チーム」の4チームでDXを推進している。DXの一つであるオンライン診療は、外来に位置付けされており、医療だけでなく心理・社会的に生活をみることができる診療看護師が担っている。

オンライン診療を導入したきっかけは、公共交通機関に乏しい受診手段に困る方や、身体的負担を軽減したい方、または受診に伴う交通費を含めた経済的理由など、高齢で過疎地域特有の医療ニーズとコロナ禍での受診控えに対応する形でオンライン診療が始まった。

オンライン診療は、ZOOMを使用し病院側がホストとなり、患者や診療に同席希望のある家族がIDとパスワードで入室する。都市型のオンライン診療とは異なり、対象者は皆高齢者のため、受信設定も含めて、患者さんと家族に負担をかけないことを前提にオンライン受診システムを構築していった。

【オンライン診療における診療看護師(NP)の実践】

診療看護師がオンライン診療を病院側から行うときは、問診の技術を生かし、疾患の評価だけでなく、高齢者総合機能評価*(CGA)を活用し系統的かつ総合的に評価し、合併症や好ましくない転帰のリスクがある高齢者を早期に特定して、より適切に、治療や多職種への連携を行っている。また、高齢者や終末期の患者の倫理的意思決定支援を援助しACPをサポートしている。これらは、NPの7つの能力を発揮した看護実践であり、在宅医療の現場で生かされている。

オンライン診療を患者側で行うwith NPとした場合は、医療処置管理の実践能力を発揮し、異常の早期発見や医師の包括的指示による超音波検査や動脈採血、創傷処置が可能である。また、情報通信機器や電子聴診器などのデジタルデータをNPのフィジカルアセスメント能力と併用することで、精度の高い正確な診療所見を聴取でき、遠隔診療から必要な受診勧奨を行い、地域住民の健康をサポートすることに繋がる。



病院でオンライン診療にあたる医師



訪問先でオンライン診療にあたる竹尾NP

認知症と糖尿病がある高齢患者の離島での在宅療養移行支援 ～『住み慣れた環境での生活』を支援する診療看護師の関わり～

長崎県病院企業団体本部 総務部主幹(教育)
長崎県壱岐病院 患者支援センター副看護部長 庄山由美(NP)

【入院中】

認知症(HDS-R:11点)の70歳代女性

認知症外来を受診時、血糖値高値を認め合併症精査を含む糖尿病教育入院となった。

インスリン療法開始し、自己注射や内服指導を行うが、患者は認知症があり

自己管理は困難であった。夫も認知機能低下があり、

患者へのインスリン注射に『できない』と拒否的であった。

島外在住の子供たちも『帰省は無理です』と協力が困難であった。

老々介護や離島の環境による介護者不足もあり、

社会的資源を対象者に適した形で導入する必要がある。

認知機能低下の患者や夫に、管理困難と判断せず、

できることへの援助や患者の思いを尊重し、関わった。

1. 入院中の関わり

- ・糖尿病合併症精査
- ・強化インスリン療法(インスリン量調整)
- ・院内外が多職種のコディネータ役(退院時カンファレンス等)
- ・夫に対しインスリン手技への自信獲得と同時に役割認識がもてるかわり
- ・多職種カンファレンス(退院時カンファレンス)
- ・社会福祉サービス導入(訪問看護、ヘルパー・デイケア)

2. 患者の反応

インスリン注射にも他人事「わたしにはできません」「早く帰りたい」との訴えあり

3. 家族の反応

認知症がある夫は患者へのインスリン注射に『できない』と拒否的発言

【退院後】

退院後訪問し、訪問看護師およびケアマネジャー・ヘルパー等に対し血糖逸脱時や生活指導等の具体的指示と協働して介入した。多職種連携が機能できるようにマネジメントし、島内での安心安全な医療の提供と在宅療養移行支援に繋げた。

1. 退院後の関わり

- ・認知機能などの評価をしながら患者に適した自立を支援した
- ・退院後低血糖予防目的にリブレ®を装着
- ・夫やヘルパー等に血糖測定法を指導
- ・インスリン量の調整
- ・訪問看護師、ケアマネジャー・ヘルパーとのタイムリーな情報共有

2. 患者の反応

インスリン注射は夫に任せるが、注射部位を表すなど処置には協力的になる。

多職種チームでの見守りにより、入院前と同様に家事や庭の草取り等が維持でき、多職種の関わりによって会話や笑顔が増えた。

3. 家族の反応

患者のインスリン注射は「俺の仕事」と役割認識がうまれた

【まとめ】

退院後も入院前同様に、住み慣れた環境での生活と無理のない血糖管理を維持でき、NPとして継続的な介入により在宅移行支援ができた。



離島医療支える庄山NP

地域医療の充実を目指した活動

～訪問看護ステーションの看護管理者として実践を通して～

医療社団法人中津胃腸病院 光根美保

【主な実践と活動】

訪問看護ステーションにおける看護管理者として、在宅療養患者の訪問や介護施設、住宅型有料老人ホーム等の法人内・外の施設を巡回しながら、地域完結型医療を目指し活動している。NPとして症状マネジメント、フィジカルアセスメント力を活かした活動を行っている。

最近では、オンライン診療（DtoPwithN）を導入し、在宅医療での活動を拡大している。

NPとしての力が活かせる活動では、施設入所の高齢者に多い症候や軽微な症状の初期診療に対応している。在宅や施設内での早期の症状マネジメントの実施により、病院受診の移動に伴う患者さんやご家族の負担の軽減、さらに、関わるスタッフの人的・時間的な労力の軽減に繋がるため、対象となる人々や環境調整等、地域医療の課題に対応できるよう活動している。

訪問中の光根NP



(地域活動で大切にしていること)

- ・受診のタイミングの判断、緊急時判断等軽微な症状を見逃さないためのポイントがわかるように情報を共有している。
- ・ケアや処置を継続することの必要性や重要性が根付いていけるよう実践を通じた教育的な関わりを行っている。
- ・スタッフそれぞれの個の力を生かし、強め、チームとして維持・継続できるようマネジメントを行っている。

【危機的な医療現場におけるNPの役割】

新型コロナウイルスのパンデミックは、地域でも同じように猛威を振るい、危機的な状態に陥った。感染症患者重点医療機関での活動を振り返った。

1. 施設内での活動

発熱外来の始動と運用において、対応とケアの統一を目指して、感染対策運用システムの体制の構築を行った。

2. コロナ病棟での活動

基礎疾患・潜在疾患をもつ高齢者も多く、心不全、肺炎兆候の早期発見、褥瘡の発生を見逃さないことなど、病態のアセスメントを慎重に、そして入念に行った。

3. クラスター対応

感染経路を調査しゾーニングや検査対応を行い、収束まで支援した。

4. 施設外の活動

自宅訪問業務ができなくなった事業所に対し、陽性者の自宅訪問や電話サポートを行った。

①重症化リスク因子を把握し、基礎疾患の観察と重症化予防に努めた。

②認知症を有する高齢者では、認知機能・身体機能の低下を防止に努めた。

③同居家族の症状出現時の重症化予防に努めた。

④住居環境をアセスメントし、家庭内の感染拡大防止に努めた。

⑤患者・家族への心理的サポート

今回の新型コロナウイルス感染症のパンデミックにおける危機的な状況に立ち向かうためには、これまでのNPとしての経験を生かした、地域医療を支える・守るという使命感を強く意識している。

感染対策活動中



医師タスクシフトの実現（重症心身障害児施設での診療看護師）

～病棟・外来・訪問での横断的活動を通して～

別府発達医療センター 後藤愛

【医師タスクシフトの実際】

- ・臨時薬の処方準備、体調不良者のアセスメントは医師の診察前に行い、対応の仕方を相談した
- ・皮膚科患者の診察では、医師に今後の治療方針の指示を受け、NPが実施することができた

【重症心身障害児施設での特定行為】

- ・気管カニューレの交換
- ・胃ろうカテーテルの交換
- ・動脈血採血、血液ガス分析
- ・感染徴候がある者に対する薬剤の臨時の投与

【タスクシフトの効果】

- ・外来診療にて、胃ろうボタンを交換することで都市部の基幹病院を受診する必要がなくなり、通院時間や待ち時間が短縮できた。
- ・看護師に皮膚ケアの方法を伝え、ケア方法の統一をはかるとともにスタッフへのスキルアップにつながった。



NPの活動に対する評価

（日本NP学会学術誌：<https://www.js-np/journal/>）

《看護部長、同僚看護師の評価》

- ・NPが院内で実施する研修により看護師のフィジカルアセスメントや病態に関する知識・技術が向上した。

《医師の評価》

- ・医師数が減少した時期においても、診療を持続することが可能であった。
- ・医師が手術など不在時でも診療を滞りなく進められた。
- ・医師の時間外労働が短縮した。
- ・医師でなければできない業務に専念することができた。
- ・チーム内で余裕を持った勤務シフトが組め、緊急手術や救急患者に迅速かつ柔軟に対応が可能となった。

修了生の活動（所属委員会、チーム活動など）

施設の機能	活動場所	活動内容	委員会・チーム活動
総合病院 (大学病院)	総合診療	<ul style="list-style-type: none"> ・担当医と患者回診、診察 ・新患・急患初期診療と対応 ・各種検査オーダー、他科コンサルト ・転院搬送時付き添い ・診療録、サマリー記載 	感染対策委員会・ICTチーム
	救命救急センター	<ul style="list-style-type: none"> ・新患・急患初期診療と対応 ・各種検査、他科コンサルトオーダー ・各種検査の実施（超音波検査・CV挿入介助・Aライン採血とルート確保・気管挿管と抜管の介助・人工呼吸療法患者の検査移動介助） 	
	手術室	<ul style="list-style-type: none"> ・麻酔科介助 	
地域中核病院 (多施設保有)	外来	<ul style="list-style-type: none"> ・発熱時トリアージ 	感染対策委員会・ICTチーム
	一般病棟	<ul style="list-style-type: none"> ・指導医の副担当（抗菌薬、補液、治療に対する効果判定） ・外来診療（問診・身体所見・検査オーダー） ・状態悪化時のアセスメントと初期診療 	下肢救済チーム（創傷管理） 新人看護師教育 退院支援チーム
	緩和ケア病棟	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅緩和医師との連携 ・退院後訪問、みなし訪問看護 ・がん性疼痛マネジメント ・意志決定支援 ・ターミナルケア 	緩和ケアチーム
	コロナ病棟	<ul style="list-style-type: none"> ・ゾーニング、家族への不安対処 	感染対策委員会・ICTチーム
	地域包括ケア病棟	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅医師との連携 ・入院時検査オーダー ・状態悪化時のアセスメントと初期診療 	
	療養支援室		呼吸リハビリテーションチーム 退院支援チーム 認知症ケア委員会
施設	老人保健施設	<ul style="list-style-type: none"> ・介護職員の教育的関わり ・救急対応（発熱、転倒、初期診療、検査オーダー） ・特定行為（褥瘡処置、抗菌薬、電解質輸液の調整、糖尿病対応） 	
	障害児施設	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトブレイク自の対応とスタッフ教育 ・特定行為（胃ろう交換） 	看護部長室で主任としての管理業務
訪問看護ステーション	管理と実践	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフ教育 ・特定行為（創傷管理、瘻孔管理） 	

当学の修了生就業の状況(2023年3月現在) 計76名

大分県内のNP修了生：33名



全国の実業者(大分県を除く)

東京都(3): 病院(2) 診療所(1)
 埼玉県(1): 病院(1)
 神奈川県(2): 病院(2)
 愛知県(2): 病院(2)
 大阪府(3): 病院(3)
 兵庫県(2): 病院(2)
 滋賀県(1): 病院(1)
 広島県(2): 病院(2)
 鳥取県(1): 病院(1)
 愛媛県(1): 訪問看護(1)
 和歌山県(1): 病院(1)
 福岡県(7): 病院(5) 訪問(2)
 鹿児島県(5): 病院(5)
 長崎県(3): 病院(3)
 宮崎県(1): 病院(1)
 佐賀県(1): 病院(1)
 沖縄県(1): 病院(1)
 合計37人
 その他(6)

奨学金について

《専門実践教育訓練給付に指名されました。院生が支給の条件を満たす場合には、学費の一部が支給され制度(BP)》

本学NPコースは令和4年4月1日から3年間「専門実践教育訓練給付制度」による 厚生労働大臣の指定講座に指名されました。院生が支給の条件を満たす場合には、学費の一部が支給されます。

《特待生授業料免除》

本学の修士課程の全入学者のうち、6名以内に対して2年次後期分の授業を免除します。